

黄色い晩

小川未明

青空文庫

垣根の楓が芽を萌く頃だ。彼方の往来で——杉林の下の薄暗い中で子供等が隠れ事をしている。きやつきやつという声が重い頭に響く。北から西にかけて空は一面に黄色く——真黒な雲がその上に掩い被さつて、黄色な空をだんだんに押しつけて、下に沈ませているようだ。刻々に黄色な空が減じて終には一直線となつて、はつきりと地平線から此方を覗き込んでいる。それが厭らしい細長い眼付で笑っているように思われた。

悪寒い風が北方の海から吹いて来る。煤けた障子を閉めて灰色の壁に向つた周蔵は、頭を手拭で鉢巻して、床の上に起上つて考え込んでいた。障子も一時は黄色に見えたが漸次薄暗くなつて、子供等の鬼事の声も遠ざかつてしまうと、遙かにボーツ、ボーツと蒸汽船の笛の音が聞える。三里彼方の直江津の港を今しも出帆する汽船が新潟に向つて立つたのであろう。

この時、私は周蔵を訪れた。

周蔵は三十二三の若者である。唇の尖つた色の浅黒い丈夫そうな男である。彼は村の吉沢という家の次男で、この頃一人この家に別家したので、彼は独身者である。僅かばかり

の金を別わかでもらつて、その日その日を何もせず暮ねこしているのであつた。昼でも彼は臥ねこんでいる。いつ行つて見ても彼はごろりと臥ねこるんで何かむしゃむしゃと食べていた。

「周さん鳥が来たから指さしておくれよ。」と沢山ひわが裏の松林ひわに来た時に行つて頼たのんで見たが、

「厭あわだ。」といつて受け合あなかつた。

彼の家うちというのは三軒長屋の中である。去年あたりまで天理教の行者が住んでいたのであつた。

その行者というのは、頭の禿かげた目尻くちの垂かれた口くち軽がるな、滑稽くちじみた男であつたがたえず信者を集めて、加持かじ祈き禱とうをしていたので、今周蔵しゅうざうのいる家かがその神様を祭まつつた場所である。行者は西隣せいりんに住すんでいた。今一軒の家には小学校の教師が住すんでいたが、今なでも尚なお住すんでいる。

その頃周蔵しゅうざうのいる家の前は、往來わうらいに出るまで圃はたけの中に細道さいだうがあつて、その道の両側りょうがわに櫨かしの木や、榛はんの木や、桜おうの木や、椿つばきの木が植うられてあり、木の根には龍りゅうの髭ひげが植うられてあつた。私はよくこの木の下したに来て龍りゅうの髭ひげに生なる青い実みを他の多くの子供等こどもらと共に争まつては取とつたものだ。真夏まなげの時分ときには櫨かしの木きの葉はがちらちらと日光にっかに輝きらいて赤い実みが葉は隠かくれに見え、

蜻蛉とんぼが来ては頭の上をぐるぐると舞っているのを独り欲しそうにその木の下に佇たたずんで、赤い実を見上げていたこともある。

今周蔵のいる家は、全く変つていて前には、格子戸が閉たつていた。中は薄暗く、鏡が光つて、大きな太鼓と榼さかきに白紙の結び付けられた生花と、御幣ごへいと、白い徳利とくりが目に入つて、それに賽さい銭箱せんが直すぐ格子戸きわの際きわに置かれてあつた。また賽銭箱の上にはだらりと赤、白、紫の交りの紐なまこが垂たれ下さつていて、青錆の出た鈴が上に吊たりされていた。其等それらの紐は、多くの人々の手垢あせに汚れて下の方が黒くなつていたことを覚えてゐる。その他堂の中には猷納いんの絵額えがくが五枚も六枚もかかつていた——毎月、三五の日には近隣の信者がこの狭い堂の中に集つて、加持祈祷かぢをしたので、その日には禿頭の行者は、時に応じ火渡りだの、刃やいば渡わたりなどをして見せたこともあつたという——僅かにそれが一年の後には、その行者は旅へ行つてしまつて、その跡は全く變つてしまつた。今迄あつた桜の木や、檜ひのきの木は他へ移されてしまい、真直まっすぐに往来に通つていた参詣人まげのための、道は耕かされて圃ぼとなり、堂は造り代しろえられて、勝手許かたてもとや便所べんじょまで附つけ加くえられて、全くの普通の長屋となつてしまい、その跡に入つて来たのが、周蔵であつた。

周蔵は独身者であるから、神様を祭つてあつた跡に入つても、決して汚れはしないから、罰ばちが当たらないだろうと近所の人はいつていたが、入ると間もなく彼は病気にかかった。多分風をひいたのだろう。明日あすになれば快なおつてしまうと、彼は昨日あたりまで平気で床の中に横よこたわつていたが、今日はなかなか苦しそうに見えた。私はいつも来るので、黙つて戸を開けて彼の枕まくら許もとに行つた。周蔵は黄色な眼付をして私の顔を見て黙つている。灰色の壁には、今年の曆が貼つてあつて、火鉢の上には煎薬せんやくの入つた土瓶どびんがぶつぶつと沸き立っている。一種、眼の眩くらみそうな臭においが室内みやうに漲みなぎつて、周蔵は起上つて坐つていたが、私の入つて来ると同時にまたごろりと眠ねころんでしまった。

「周さん、頭が痛むかい。」

と私は、始めて言うつと、

「ああ、頭は破われそうだ。大分熱がある。」と答えた。

「この薬を飲のむんでないのかい？」

と私は、ぶつらぶつらと黄色い泡を立てて沸き上つている煎薬の土瓶に目を止めていうと、周蔵は後向きに臥ねているままで、それには黙つて、

「あ——苦しい。苦しい。」といつていた。

「ああ、周さん、薬が沸え溢れるよ。」というのと、

「ああ、苦しい、下しておくれ。其処まで行けねえ。」

といつて例の尖った口先を心持此方に向けて頼んだ。

私は、袂たもとでその沸えたぎっている煎薬の土瓶を下して、周蔵の言うがままにそれを茶碗に移して枕許もっに持て行てやると、彼はむくりと起き上つて、熱いやつをぶうぶうと吹き出した。

私は、黙つて彼の枕許かおつきに坐つて見ていた。

やがて、大分冷めた時分に、周蔵は醬油色をした、臭の劇はげしい煎薬の茶碗を取上げた。

最初は眼を閉つぶつて、尖った唇で何か甘い物でも飲むような調子で悠然ゆつたりと吸い始めたが二口、三口目から、彼の顔かおつき付は怖しく變つて、口は耳許まで裂けたように薄黒い歯をむき出して、大きな口を開けて、眼は険けわしげに光った。私はいつもの周蔵でないように怖ろしかった。周蔵は薬を飲むとまた苦しうに呻うなり吟出した。私は家へ帰ろうかと思つたが、いかに周蔵の苦しんでいるのを見捨てて帰るに忍びなかつた。で、

「周さん、どんなに苦しいか。」と聞いた。

「死にそうに苦しい。」と彼は答えたがその声すら、重々しかつた。室へやの内は熱臭く、煎

薬の臭いで一ぱいになって、私もどうやら頭が痛み出して来た。

「私は家へ帰るよ。」と半分周蔵に気兼ねをして、——この儘彼の苦しむのを見捨てて帰るのが不人情のようで心に咎めたから——声が戦えたのである。すると周蔵は私の名を呼んだ。

「正雄さん、私の家へ行って母親に来いといってくれないか——今夜にでも私は死にそうだ。」と彼は急に苦しみ出した。

私は死ぬるといふことは偽だと思つた。しかし風をひいても、ちよつとした病気でも、晩方になると重くなると聞いていたから、それで周蔵も斯様に苦しみ出したのだ、とは子供心ながらに思わぬでもなかつたが、彼の様子は実際苦しうであつた。

「母親がいなければ仕方がない。町へ行って針医さんと呼んで来てくれないかね。」と苦しみながらも、私に言葉を柔げて願うようにいつた。

もう室の内は臥ている彼の顔が見えぬ迄暗くなつたのである。私はランプを点てやろうかとも思つたが、何処にランプがあるのか分らないので、直様家を飛び出して、彼の母親に告げて、針医を迎いに行つてやろうと思つた。

外に出ると黄色かった空は、いつしか灰色に黒ずんで、空には重たらしい押え付けるような黒雲が、私の村の上を去らずにいた。その雲の中でも最も真黒な所が周蔵の家の頭になつてゐる——私は全く日の暮れないうちに行つて来ようと一生懸命に駆け出して、むらほ村端ずれの周蔵の実家に駆け付けたのである。楓の生垣をした村の細道を通り、暗い杉林の下に出たが、もはや遊んでいた子供等は、いづれも散じてしまつて、誰もいなかった。私は気味が悪かつたが、眼を閉いで口の中で一ツ、二ツとかけ声を出して、自から勇氣をほげまして駆け出した。私の下駄の力の入った踏み音のみが、あたり四境の寂しさを破つて響いた。脊中にはしつとり汗ばんで顔が熱つたけれど、彼の実家に行つて用を済して更に町へ行つて、針医を呼んで来なければならぬ重役を帯びていた——それにしても、私の母親は私の帰りの遅いのを心配して、今頃外に呼びに出ているかも知れないと思つた時、ますます益々速力を疾めて、周蔵の実家を目ざして駆け出した。

彼方に桑圃が一面につづいてゐる。その奥の奥にちよつと藁屋が見えた時に、私はもうじきだと心のうちで独りで囁いた。

「一ツ二ツ。」とかけ声を出して、やつと周蔵の実家の戸口に駆け付けた。ちようど夕飯時で、ランプの下には膳を据えて、彼の実兄と嫁とが嬉しそうに飯を食べていた。兄とい

うのは四十近い、肥ふとつた顎あご髭ひげの沢山にある脊の低い男で大工である。いつも笑顔をしているが、これで弟などには情じょう合あいが薄いと聞いていた——彼の母親は見つからない。私は余りに駆けたので、急せきこ込んで、碌ろくろく々ろくろく声も出なかつたが口くちばや早はやに、

「周さんが病気だから早く小母おぼさんに来てくれいと周さんがいったよ。」と戸口から大声に告げると、彼の兄というのが、

「ハア、母おふくろ親は今湯に行きやしたから、帰かえれば直ぐ行くといつてくんない。大きに御苦勞でした。」と立上りもせず——箸を持ったまま答えた。嫁よめというのも一寸ちよつと此方を振向いて、

「大きに御苦勞さんでした。」といったばかりである。

私はあまりのあつけなさに腹立しいというよりは氣抜けがした。

「苦しいと、うなっているのだから早く来ておくれよ。」

といい残すとその家を出たが、急に周蔵が可哀そうになって彼の兄が憎くなった。それだから私は大声に軍歌をうたつて、聞えよがしに怒ど鳴なつてやった。

「ああ正まさ成しげよ正成よ……。」と口から出るがまさに大声で叫わめいて、この村に響き渡れ！

彼の兄と嫁との耳に鳴り響いて鼓膜を破つてやれ！ という意氣込みで怒鳴り付けた。い

つしか私は暗い杉林の下を通り抜けて、町へと急いだ。中途からは全く軍歌も止めて、私は又考え込んで途を歩いた。今頃私の母は私の帰りの遅いのを待って、心配しているであろう……しかし周蔵のために遅くなったのだから……言い訳が立つと考えた。

考えながら、途を歩いている間にも、周蔵の兄がランプの下で飯を食べていた姿が目に見え、ついで、暗い熱臭い室の中でうめいている周蔵の、黄色い眼付が目に見え、うなり声が見えるようだ……私は、また駆け足を始めた。

「一ツ、二ツ。」と口の中で言いつて、全速力を出して町へと行った。

やがて町へ入った。軒の低い、柱の曲った雁木がうねうねとつづいて、大抵の家は燈火をつけていたが、まだ燈火を点けずにいる家もあった。朝出て帰って来た車引などは、家の前に荷車を置いて、上からいろいろの道具を取り下しているものもある。また、私より一歩先に道具箱を担いで、帰って来たばかりの大工の家もあった。其様家の内の光景などを一々覗き込んで、町の中程になっている按摩の家を訪ねた——家は九尺二間で裡は真暗である——私は「今晚は。」と入った。

暗がりの中で、ごごとごとさしている音が聞えたけれど、私の声に返事をしない。

「按摩さんはいるかい。」といった。

「ハア……。」と、力のない老人の声が耳に入った。

「今直いまぐに来ておくれ、大病人があるから。」といった。私は大病人といわなければ按摩や医者などは直いまぐに来ない。だから、呼よびに行く時は大病人といった方が一番いいと誰やらいったことを覚えていたのでそういった。

「何方どちら様ですかえ。」と、暗がりから老人は聞いた。

「一番前の長屋だよ、早く来ておくれ。」

「お堂あたのあつた辺あたりですかえ。」

「あすこの家だ。」

「あの跡あとへ誰か入りましたかね。」

「周しゅうさんが入つたのだ。」

「ああ、吉沢の次男ですけえ、あの人が悪いんですかえ。ハア直に行きやす。」

「直に来ておくれ。」

「あなたと一しよに行きやす。」

と、直に按摩は仕度にかかった。私は暫らく、戸口に待っていると、こつこつと杖を捜す

音がして、はや下駄を足につっかけているらしい。私は、他に誰もいないのかと思ったが、やはり暗がりだ。誰やら、ごとごとやっている音がする。私は婆さんがいるのだなと思った。

爺さんは按摩で針医を兼ねている。手に大きな箱を垂下^{ぶらさげ}げていた。盲目で竹の杖を突きながらとぼとぼと私の後方^{うしろ}について来たが、途中から、私に手を引いてくれいといった。私は按摩の手を引きながら、低い、暗い、凸凹のあるうねうねと曲つた町の雁木下を歩いて、やがて村へ差しかかったのである。西の山は真黒く浮き出ている。空には黒雲の間から、稀^{まれ}に星の光りが見えた。暗い物凄い晩である。先刻^{さつき}まで黄色かった空の名残は、殆ど^{ほとん}もはや見られなかったが、思いなしか、西の空は何処やら薄黄色ばんでいるようにも思われた。按摩は腰が曲つて黒の羽織を着ていた。

手は筋ばつて痩せ衰えている。全くの盲目で一寸先も分らないといった。私は早く帰りたいが、按摩の手を引いているので思うように歩けなかった。

歩きたびガタガタと箱の中が鳴る。箱は木で出来ている真黒な四角な箱であった。私は箱の中に針や、葉や、いろいろな道具が入っているのだと思つたから、

「この箱の中に針が入っているの？」と聞くと、

「ハア、左様でげす、これが私の商売道具です。」と言った。

「針を打つのは痛くないかい。」

と、私は光っている鋭い針が肉に突込まれるのを想像していった。

「少しは痛う御座いやす。針ていうものは効果の恐ろしいもので生死にかかわるものでげす。」

といった。

私は、生死にかかわると聞いてびつくりした。

「針を打つて死ぬことがあるかい。」と問うと、

「それは、二つ一つの針がありやす。もう助かるか助からぬ時に打つ針で滅多に打つことの出来ぬ針でげす。」

と答えた時に、私は周蔵の病気はこの二つ一つの針を打たなければならぬのではないかと不安でならなかった。そう思つて、この痩せ衰えた盲人を見ると、何となくこの盲人が怖いように感ぜられた。二人はその後無言であつた。私の手は折々戦えた。暗い杉林の下を通り、また桑圃を抜けて、だんだん周蔵の家の近くに來た時按摩は私に向つて、

「お堂の前の途は、まだありやすかえ。」と聞いた。

「いや、もう無くなつてしまつた。」

又按摩は、

「圃になりましたかえ。」と聞いた。

「アア、圃になつてしまつた。」と私は言つた。

按摩は、しばらく黙つていたが、また、

「大けえ榛の木があつた筈だが、あれは伐りやしたかえ。」と問うた。

「あの木は去年枯れてしまつた。而して今年の春伐つてしまつたよ。」と私は答えた。

「あの木は村の鬼門に植つている木で昔からある木でげす……。。」と按摩は言つた。私は

何んだか慄として、

「針を木に打つても快らないか？」と聞くと、

「ハハハハハ。」と、按摩は齒のない口を開けて冷かに笑つた。何故笑うのだから私には分

らなかつた。私はただ黒い箱に目を止めて不思議でならなかつた。二人はやつと、周蔵の

家の前に来た。私は母でも迎いに来てはいはないかと思つて、耳を澄したがそれらしい声

も聞えなかつた。また周蔵の母親の来ている様子もなかつた。家の内は燈火の点いた様

子もなく真暗である。もと西隣の行者が住んでいた家は、今も尚お借り手がなくて空家で

あつた。東隣の小学校教員の家は、はや雨戸を閉めてしまった。真暗な家の中から周蔵の苦しんでうめく声が聞える。私は思わず其処たたくに佇んだ。

きつとこの盲人は二つ一つの針を打つだろう……而して周蔵の命は助かるまい。

ああ、どうしよう……この儘、私は按摩の手を振り放して逃げ出してしまおうかと立止って、按摩の様子を見守ると、按摩はしかと私の手を握って頻しきりに前へ出たがって身体をもじもじさしていた。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 小川未明集 幽霊船」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年8月10日第1刷発行

2010（平成22）年5月25日第2刷発行

底本の親本：「定本 小川未明小説全集2 小説集※〔#ローマ数字2、1-13-22〕」講談社

1979（昭和54）年5月6日第1刷発行

初出：「早稲田文學」

1909（明治42）年4月号

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2018年9月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

黄色い晩

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>